

第一編 原始

天間林村には全国的に有名な二ツ森貝塚をはじめ、二十四遺跡が確認されている。これらの遺跡を残した人々はいつごろから住みつくようになったのだろうか。また、その人々はどんな生活をしていただろうか。

原始時代を旧石器時代・縄文時代・弥生時代に区分し、周辺市町村の資料も参考にして時代毎にみていきたい。

第一章 旧石器時代

我々人類最古の祖先を求める研究は、アフリカ大陸を中心に長年続けられており、二百数十万年は遡るといわれる化石骨が発見されている。

我国においては、昭和二十四年群馬県岩宿遺跡から発見された石器が、縄文時代以前の旧石器であることが明らかになって以来、旧石器時代の調査がすすめられるようになり、全国で次々に発見されつつある。

青森県でも縄文時代以前とされる遺跡は、今日までに、東通村物見台・野辺地町目ノ越・金木町相野山・弘前市大森勝山・今別町中宇田・蟹田町大平山元Ⅱ・東北町長者久保遺跡等が知られている。

旧石器時代の人々は、簡単な石の道具や動物の骨あるいは角を加工したものを使用しているだけであり、まだ土器は製作していない。ハンターとして獲物を追い続けるのが毎日の仕事であった。住居は洞窟や岩陰など自然の地形をそのまま利用している。

天間林村遺跡分布図



第一編 原始



天間林村遺跡一覽表

番号	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地目	出土品
1	菩提木遺跡	天間館字菩提木1	丘陵	包含地	縄文(後・晩)史	山林	縄文土器片、土師器片
2	向川原遺跡	天間館字向川原29~30	台地(河岸段丘)	"	縄文(後)	水田	縄文土器片
3	白石遺跡	天間館字白石15	台地(河岸段丘)	"	縄文(晩)史	"	縄文土器片、須恵器
4	堰代遺跡	天間館字堰代5	丘陵(先端部)	"	縄文(後・晩)史	山林畑	縄文土器片、土師器片、石斧
5	市の渡遺跡	天間館字市の渡	丘陵(先端部)	"		墓原野	
6	夏間木遺跡	天間館字夏間木	台地	"	縄文(後・晩)	水田山林	縄文土器片
7	十枝内遺跡(1)	天間館字十枝内	"	"	縄文	水田山林	縄文土器片
8	十枝内遺跡(2)	"	"	散布地	歴史	畑	土師器片
9	听平遺跡	天間館字听平	"	住居跡	歴史	草地	土師器片、須恵器片
10	底田遺跡(1)	天間館字底田	丘陵	散布地	縄文(後)	山林	縄文土器
11	古和備遺跡	天間館字古和備100	丘陵(端)	包含地	縄文(中)	山林	縄文土器
12	听崎遺跡	天間館字听崎	台地	館跡	歴史	牧業地原野	土師器片
13	森ヶ沢遺跡	天間館字森ヶ沢1	台地	包含地	縄文(後)史	畑宅地	縄文土器片 石器、土師器、須恵器、鉄製斧
14	へどもり遺跡	天間館字家ノ上	丘陵(端)	墳墓	歴史	畑	須恵器
15	大平遺跡	天間館字大平	台地(河岸段丘)	包含地	縄文(早~後)	畑	縄文土器片
16	松ヶ沢遺跡	天間館字松ヶ沢	台地	包含地	縄文(後)史	山林水畑	縄文土器片、土師器片
17	館ノ下遺跡(1)	天間館字館ノ下35	台地(河岸段丘)	城跡	歴史	山林原野	
18	館ノ下遺跡(2)	天間館字館ノ下27	台地	"	歴史	畑原野	土師器、石製品
19	森ノ上遺跡	天間館字森ノ上	台地	墳墓	歴史	畑	
20	家ノ下遺跡	天間館字家ノ下50	台地(河岸段丘)	城跡	歴史	宅地	
21	二ッ森貝塚	榎林字貝塚	台地	貝塚	縄文(前・中)	山林畑	縄文土器、石鏃、石斧、骨角器 貝類、獣骨類
22	底田遺跡(2)	天間館字底田	丘陵斜面	包含地	縄文(晩)史	山林	縄文土器片、土師器片
23	鳥谷部遺跡	天間館字鳥谷部	"	"	縄文(前)	原野	縄文土器片、石鏃
24	舟場向川久保遺跡	天間館字舟場向川久保	"	"	縄文(晩)	山林	縄文土器

第二章 縄文時代

縄文土器を製作・使用し、狩猟・漁労・植物採集に依存して生活していた時代である。放射性炭素 C_{14} を使っての年代測定では、紀元前一万年ごろから紀元前後ごろまでのおよそ一万年とされている。

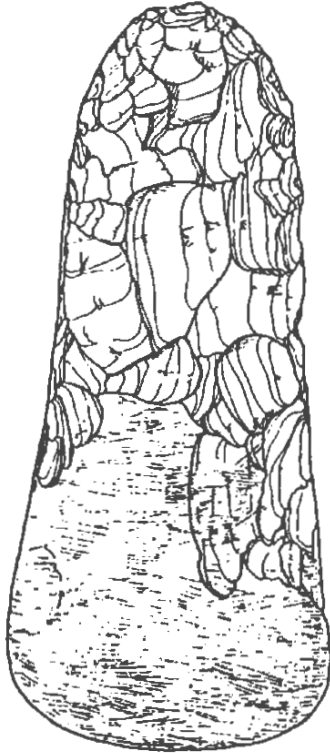
現在は、この縄文時代を草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の六期に区分するのが普通である。

第一節 草創期

縄文時代のうちでも最も古い時期であり、縄文文化の黎明期である。

本県では、草創期の遺跡は最近まで不明であったが、昭和五十年・五十一年にわたり県立郷土館が発掘調査した蟹田町大平山元I遺跡がこの期のものであったことから、次第にその文化内容が明らかにされつつある。

この遺跡からは住居跡やその他の遺構は確認されなかったものの、出土遺物には石斧・尖頭器・石鏃・石錐・ナイフ等の石器及び、少量ながら平底の土器がある。石鏃が認められることから、飛び道具である弓矢を用いて獲物を追う生活が始まったことがわかる。



草創期の局部磨製石斧
(大平山元I遺跡発掘調査
報告書より)

編年表

		時代区分	関東	東北南部	青森県	天間林村の遺跡
A.D. 300	弥生時代	後期中期	弥生町 野沢	榊形 福浦島下層	田舎館式 二枚橋式	
		前期	千網	大洞 A' " A	大洞 A' (亀 " A	堰代遺跡 底田遺跡(2)
B.C. 300	繩文時代	晩期	杉田	" C ₂	ケ " C ₂	白石遺跡 夏間木遺跡
		前期	安行 IIIc " IIIb " IIIa	" C ₁ " B-C " B	岡式 " C ₁ " B-C " B	舟場向川久保遺跡
1,000	繩文時代	後期	安行 II " I 曾利 B 加堀之内寺 称名寺	新地 宝ヶ峰 南境	十腰内 V " IV " III " II " I 大曲 I	向川原遺跡 森ヶ沢遺跡 松ヶ沢遺跡 底田遺跡(1) 十枝内遺跡(1) 夏間木遺跡
1,800		中期	加曾利 E 3 2 1 阿玉台：勝坂 五領ヶ台	大木 10 " 9 " 8b " 8a " 7b " 7a	榎林(最花) 円筒上層 e式 " d式 " c式 " b式 " a式	古和備遺跡 二ッ森貝塚
2,800	繩文時代	前期	諸磯 c " b " a 黒関山層 花積下層	大木 6 " 5 " 4 " 3 " 2b " 2a " 1 宝浜	円筒下層 d式 " c式 " b式 " a式 ムシリ III	二ッ森貝塚 鳥谷部遺跡
4,800		早期	茅野 山島層 田戸上下層 " 輪戸台草 三花井	表槻ノ木下層 III 寺 明大	早稲田 V 赤御堂 (早稲田 IV) ムシリ I 物見台 + 沢 吹切ノ 沢 寺ノ 浜 白	大平遺跡
7,500	繩文時代	草期創	大橋 谷寺立	一ノ沢向	大平山元 I	
10,000		旧石器代				大平山元 II 物見台

従来、旧石器時代のものといわれていた東北町長者久保遺跡は、その出土石器が大平山元I遺跡のものと近似しており、土器は発見されていないもののこの時期の遺跡の可能性もある。

草創期の遺跡は天間林村内からはまだ発見されていない。

第二節 早期

遺跡の数が増加し、縄文時代の人々の生活をほぼ復原できるようになるのは早期からである。

住居は、地面を五十センチメートル位掘り下げた竪穴住居であり、平面形は円形または隅丸方形である。住居内には、炉があるものもないものと二種確認されている。

日常の容器あるいは煮焚用として用いられた土器は、底が尖っており、尖底土器と呼ばれている。地面をいく分掘り、そこに突き刺して安定させたものと思われる。

土器の表面にはサルボウなどの貝殻を使ってつけた文様が多く、縄による縄文文様は早期末になってみられるようになる。

天間林村では大平遺跡がこの時期のものであり、六千年以上前にすでに人々が住みついていたことになる。



長者久保遺跡と発見者の角鹿扇三氏

大平遺跡

小又部落の北西およそ五〇〇メートル、坪川の河岸段丘上の畑が遺跡である。この遺跡からは、早期の土器の他、前期・中期・後期の遺物も出土している。数千年の長期間にわたり、断続的に生活の場として利用された所である。

第三節 前期・中期

早期において、小又部落北西の大平に生活の跡を残した人々は、この時期になると、古和備や二ツ森にも住みついており、やがて広大な貝塚を残すようになる。

この時期に主として使用された土器は、土管の片方に底をつけたような形をしており、円筒土器と称されている。円筒土器は、青森県を中心に北奥羽から北海道南部に多く分布している。土器表面には種々の工夫を凝らした縄文文様がみられる。また、中期の土器は粘土紐の貼り付けによる立体的装飾がみごとであり、縄文時代を通して最も豪華な土器が作られた時期であるともいえる。

縄文時代にはいると、それまで寒冷であった気候が次第に暖かくなり、南極や北極の水が溶けだして海水面が上昇し始める。そのピークにあたるのが前期である。現在淡水湖である小川原湖は、全面海水に覆われ、さらに二ツ森周辺の低地にまで海水が押し寄せていたのである。やがて、中期以降になるとようやく後退していき、縄



早期の尖底土器
(小田野沢より)

文時代の終わり頃には、ほぼ現在の海岸線を形成する。小川原湖周辺には二ツ森貝塚のほか、六ヶ所村唐貝地・三沢市早稲田・野口・山中・天狗森など本県を代表する貝塚が多くみられるが、いずれも海水が入り込んでいた時期に形成されたものである。中でも次に述べる二ツ森貝塚は、本県最大であり、日本有数の貝塚ともいえよう。

二ツ森貝塚

二ツ森貝塚は、小川原湖に注ぐ七戸川と赤川にはさまれた台地上にある。現在は、大部分タバコ畑や蔬菜畑として利用されており、一部宅地や道路になっているものの、保存状態は比較的良好である。

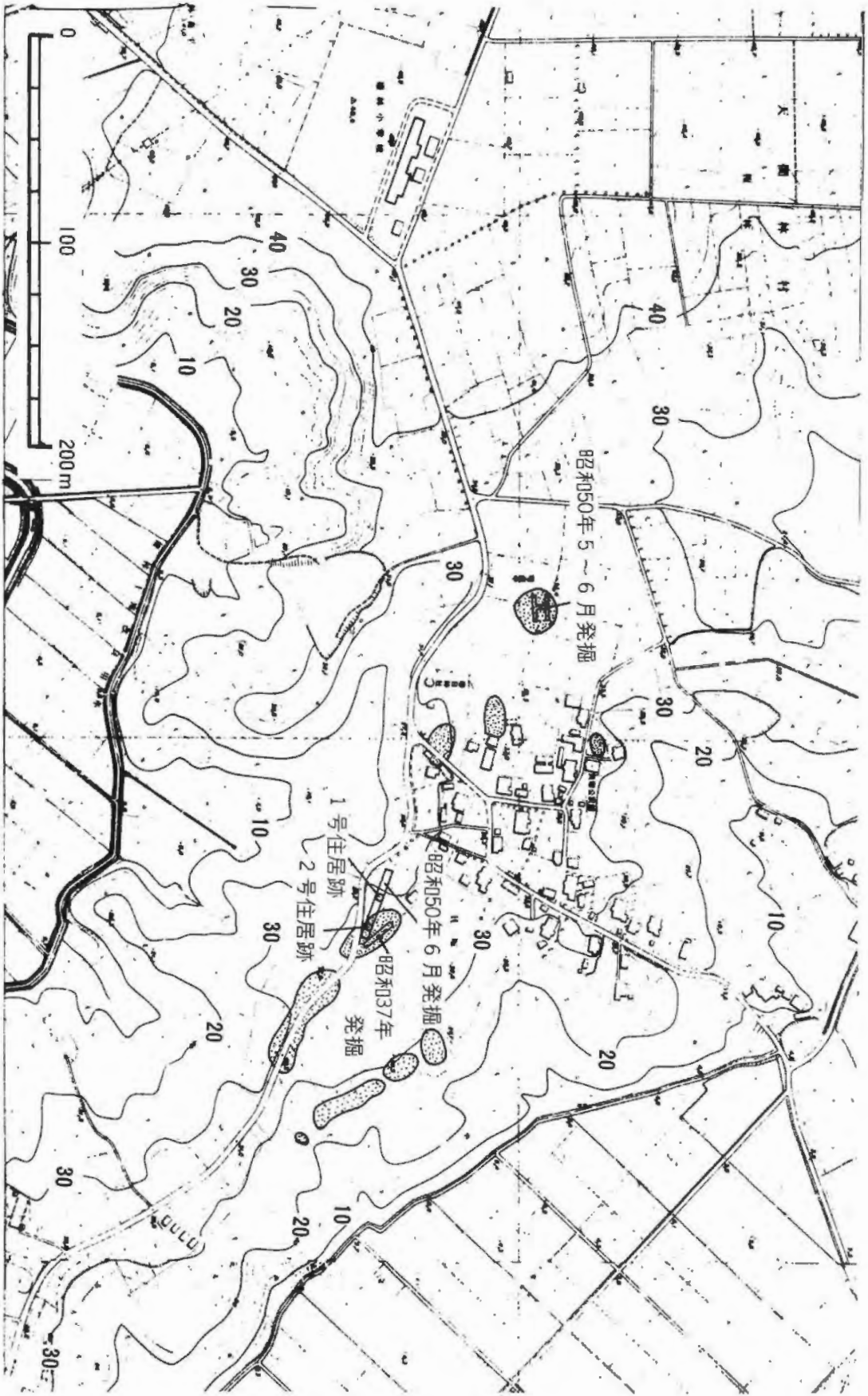
この貝塚の呼称は、現在では「二ツ森貝塚」が一般に使われているが、かつては家の前貝塚・貝盛貝塚・天間林村貝塚・榎林遺跡などと呼ばれたこともあった。

貝の分布は、貝塚部落を境に東側と西側に分けられる。東側は台地の縁に沿って北に四ヶ所・南に二ヶ所認められている。西側は表面観察の結果、三ヶ所確認されており、全体からみれば馬蹄形をしている。

この貝塚は、明治二〇年広沢安任が東京人類学会で報告したのが中央で紹介された初めであり、さらに佐藤重紀氏が明治二十四年刊行の東京人類学雑誌に発掘報告を掲載したのが契機となって、以後たびたび調査されることになった。特に、角田文衛氏が昭和八年の発掘調査で得た土器を「榎林式土器」と命名し、東北北部における縄文時代中期末に編年された功績は大きく、以来類似の土器は、榎林式と呼ばれ、この貝塚が広く知られることになった。榎林式土器は、東北南部仙台湾地方で盛行した大木系土器の影響を受けた土器であり、土器表面に粘土紐にかわって横位に沈線を付するのが特徴である。



ニッ森貝塚を中心にした航空写真



ニッ森貝塚研究史

			第一編 原 始
明治	20年	広沢安任が本貝塚を「アイヌの遺跡の事」として東京人類学会に報告する。	
	21年	佐藤重紀初めて発掘調査を行う。	
	22年	佐藤重紀再び発掘調査し、その結果を学会に発表する。(東京人類学会雑誌第6巻第59号「陸奥国上北郡の貝塚」)	
	26年7月	若林勝那が東京帝国大学の命を受けて、調査研究する。(東洋学芸雑誌第10巻第146号「陸奥国上北郡貝塚村貝塚調査報告」)	
昭和	7年2月	道路工事の際、貝層中から鯨骨製青竜刀形骨器をはじめ多数の遺物が発見される。ニッ森貝塚遺跡保存会が設立され、出土遺物の保管にあたる。	
	8年5月	喜田貞吉試掘調査する。	
	8年8月	角田文衛発掘調査を実施し、「榎林式土器」型式を提唱する。(考古学論叢第10輯「陸奥榎林遺跡の研究」)	
	37年8月	青森県教育委員会の依頼により、弘前大学村越潔他14名の調査員が発掘調査する。(青森県ニッ森貝塚発掘調査概要)	
	37年11月	鯨骨製青竜刀形骨器他3点が県重宝に指定される。	
	47年11月	青森県立郷土館でニッ森貝塚東側の貝層分布地図を作成する。	
	50年5～6月	天間林村教育委員会が畑地造成に伴う緊急調査を実施する。	
	50年6月	天間林村教育委員会が村道の付替工事に伴う発掘調査を実施する。円形の竪穴住居跡が2軒明らかになる。	
	50年11月	新築の天間林中央公民館に展示コーナーが設けられ、出土遺物が常設展示される。	一四

今日まで二ツ森貝塚からは、いろいろな人工遺物や自然遺物が出土している。その主なものを列記すると次のようになる。

人工遺物 容器としての多くの土器、石槍・石鏃・石小刀、石皿、磨石、石冠等の石器

鯨骨製青竜刀形骨器・鹿角製尖頭器・猪牙製垂飾品・鹿角製又状品（以上四点県重宝指定）骨製櫛・くつべら状骨製品・貝製腕輪など

自然遺物 （貝類）サルボウ・ヤマトシジミ・ハマグリ・アカガイ・ホタテガイ・マガキ・アサリ・オオノガイ・サザエ等二十五種

（魚類）ボラ・スズキ・マダイ・クロダイ・フグ・ヒラメ・サメ・ウグイ・カサゴ以上九種

（哺乳動物）ニホンジカ・イノシシ・ノウサギ・ツキノワグマ・イヌ・タヌキ・クジラ・アシカ・ムササビ以上九種

（鳥類）カラス・ハクチョウ・マガン・カモ・ヒメウ・カイツブリ・キジ以上七種

これら自然遺物とした貝類・魚類・哺乳動物・鳥類は、すべて二ツ森貝塚を残した人々の食料とされたものである。中でも、いまではこの地方にみられなくなったが、シカとイノシシは圧倒的に多く、貴重な食料源であったことがわかる。

猟は男たちの仕事とされているが、シカやイノシシは屈強な男どもが弓矢を持って待ち伏せても、いつでも捕獲できるというものではなく、時には相当日数獲物にありつけなかったこともあるにちがいない。そういう時は、女性が採集してきたクリやクルミ・トチその他の木の実・草の実、ヤマノイモ・トコロなどあらゆるものが生活の糧とされたことであろう。

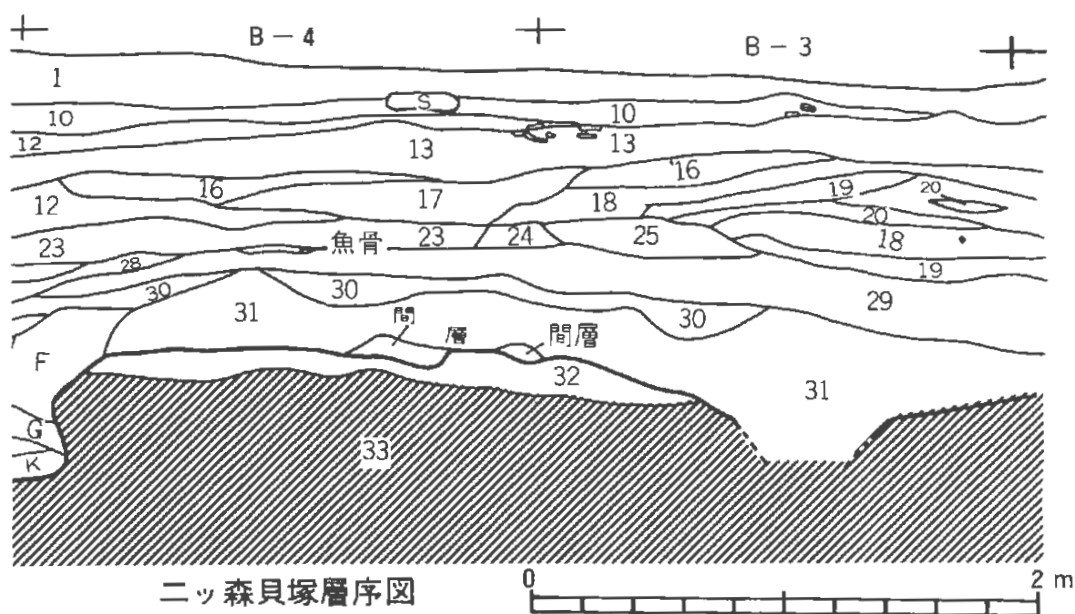
この貝塚からは二ツ森貝塚人ともいべき人骨が数体分出土しており、現在新潟大学医学部に保管されている。縄文時代の人骨は、日本国内ですでに数千体も発見され、その人種について多くの人類学者が研究をかさねてきた。そしていまでは日本人の直接の先祖であるというのが定説となっている。すると、今から四千年以上も前の二ツ森貝塚人は、我々村民の先祖であったともいえる

昭和五十年、村道の付替工事に伴う発掘調査の際、この貝塚を残した人々の住居跡が二軒発見された。一軒は長径四メートル・短径三、四メートルの楕円形、他の一軒は直径約五メートルのほぼ円形の竪穴住居跡である。住居の構造は掘立小屋形式の簡単な構造のものであったと想像される。住居内には、はつきり炉といえるものはないが、焼土が散っている個所が認められるので、中で火を用いていたことは確かである。鉄製品がまだ使用される前のことであり、土器が貯蔵用のほか、今日のナベ・カマと同様煮焚用具としても用いられていた。これらの住居が残された年代は、土層や貝層の堆積状況から、五千年以上前のものと考えられる。

二ツ森貝塚出土の多くの遺物は、森田金蔵さんを中心とした二ツ森貝塚保存会の方々が、永年にわたって保存していたが、そのすべてが現在天間林村中央公民館に常設展示されている。

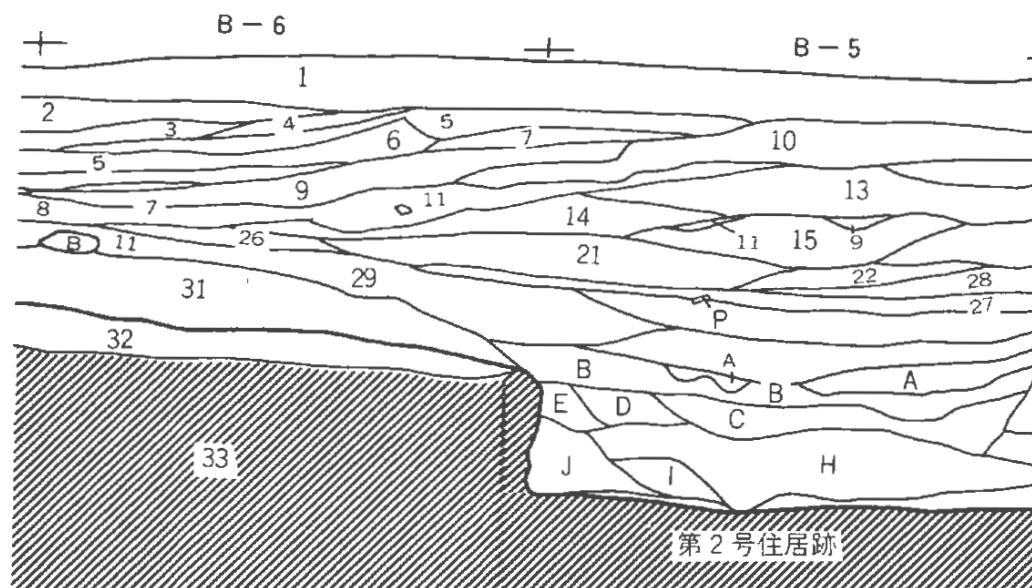


榎林式土器(ニッ森貝塚出土)



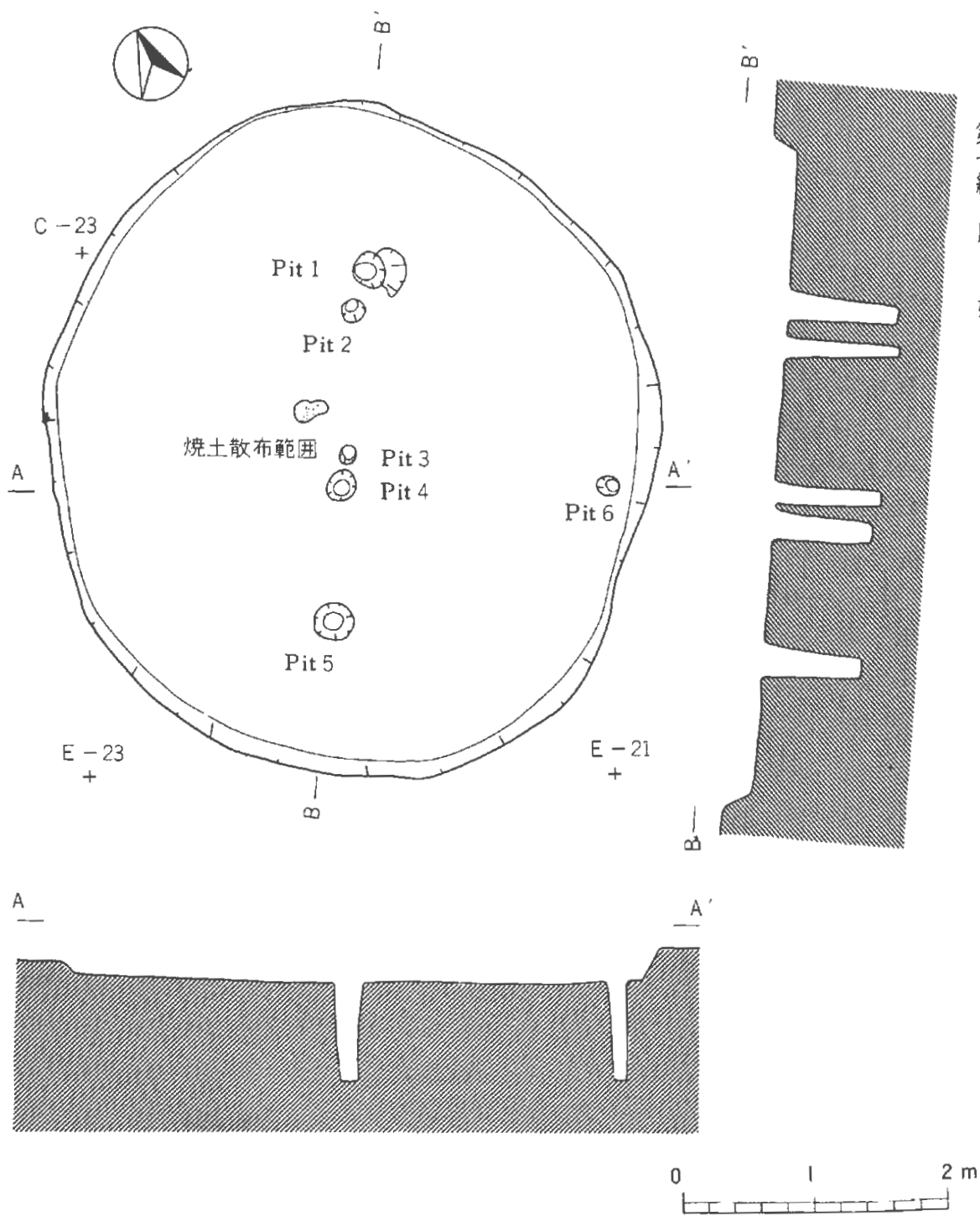
ニッ森貝塚層序図

- 1層 耕作土
- 2層 黒褐色土
- 3層 シジミ純貝層
- 4層 暗褐色土 (カーボン若干混入)
- 5層 茶褐色土 (カーボン若干混入)
- 6層 茶褐色土 (カーボン若干混入)、カキ・フジツボが多い。
- 7層 黄褐色粘土層
- 8層 カキ純貝層
- 9層 茶褐色土、ハマグリ・カキ・シジミ・ホタテ (カキ主体)
- 10層 混土貝層、カキ・シジミ・ホタテ (カキ主体)
- 11層 暗褐色土、ホタテ・シジミ (ホタテ主体)
- 12層 シジミ純貝層
- 13層 黒褐色土、(砂質、カーボン若干混入)
- 14層 黒褐色土 (多量のカーボン混入)
- 15層 暗茶褐色土
- 16層 暗褐色土 (砂質)
- 17層 ホタテ・サルボウ・ハマグリ (ホタテ主体)
- 18層 褐色土 (カーボン若干混入)
- 19層 暗褐色土 (カーボン多量混入)
- 20層 黒色土
- 21層 ハマグリ純貝層 (カーボン混入)
- 22層 カーボン層



ニッ森貝

- 23層 混土貝層、シジミ
- 24層 灰層
- 25層 暗褐色土（混土貝層）
- 26層 ホタテ純貝層
- 27層 暗褐色土、シジミ・ホタテ・アカニシ・ハマグリ（主体はアカニシとホタテ）
- 28層 ハマグリ
- 29層 茶褐色土（砂質、カーボン若干混入）
- 30層 暗褐色土（カーボン若干混入）
- 31層 暗褐色土（砂質、ローム粒・カーボン混入）
- 32層 暗褐色土（砂質、ローム混入のため若干黄色い）
- 33層 黄色ローム層
- A層 黄色ロームブロック
- B層 砂質暗褐色土（カーボン・ローム粒混入）
- C層 砂質黒褐色土（カーボン・ローム粒混入）
- D層 砂質黒褐色土（カーボン・ローム粒混入）
- E層 壁崩壊土（砂質でロームと黒色土混入）
- F層 砂質明褐色土（ローム粒若干混入）
- G層 砂質黒褐色土（カーボン若干混入）
- H層 砂質黄褐色土（ロームブロック全体的に混入）
- I層 砂質黒褐色土（ロームブロック若干混入）
- J層 砂質黄褐色土（ローム粒全体に混入）
- K層 砂質暗褐色土（ローム粒全体に混入）



ニッ森貝塚1号住居跡

第四節 後期・晩期

縄文時代後期・晩期になると、村内では夏間木遺跡（後期）十枝内遺跡(1)（後期）堰代遺跡（晩期）など十一遺跡が知られており、各地で縄文人が生活していたことがわかる。

彼らの生活は、前期・中期にくらべると多様化しており、それに伴って使用される容器も皿形・浅鉢形・壺形・注口・香炉形と各種の器形が認められる。

縄文時代は呪術に支配された時代であるといわれるが、中でも後期から晩期にかけてその傾向が強く、朱を塗られ美しく飾られた供献用の遺物が数多く出土している。特に晩期にはその傾向が強く、世界的に有名な木造町亀ヶ岡や八戸市是川は、その代表的な遺跡である。本村では、堰代遺跡から同様の土器が出土しており、相当高度な文化を誇っていたものと思われる。

縄文時代の墓は、村内ではまだ発見されていないが、県下では各地で調査されている。その大部分は、地面を円形あるいは楕円形に掘り下げ、土葬したものである。特殊な例としては、石の棺に埋葬した石棺墓・白骨化してから骨だけを甕に入れて再埋葬する甕棺墓があり、これらは後期によくみられる。

墓の中からは、死者が生前身につけていたと思われる副葬品がしばしば発見される。勾玉や丸玉のペンダント・石製または土製の耳飾り・貝製腕輪・骨製櫛その他様々な装飾品があり、美しく見せたい、飾りたいという願いは縄文の昔から今日まで変わることがなかった。



倉石村薬師前遺跡出土の甕棺



八戸市是川遺跡に復元された竪穴住居

十枝内遺跡(1) (後期)

十枝内部落北西の丘陵にある。現在は水田及び山林として利用されている。遺物は後期初頭の破片だけであるが、その中に土器片を再利用した円盤状土製品もみられる。

底田遺跡 (後期)

市ノ渡から底田に行く道路西側一帯の丘陵が遺跡である。畑地造成の時遺物が出土したものである。

夏間木遺跡 (後期・晩期)

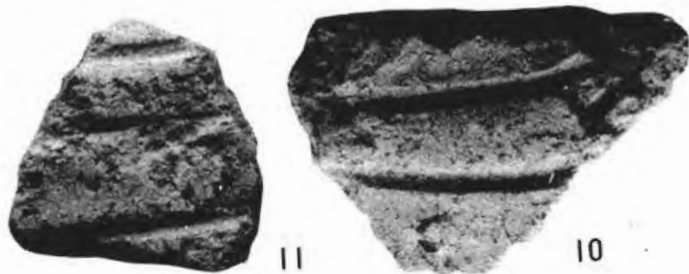
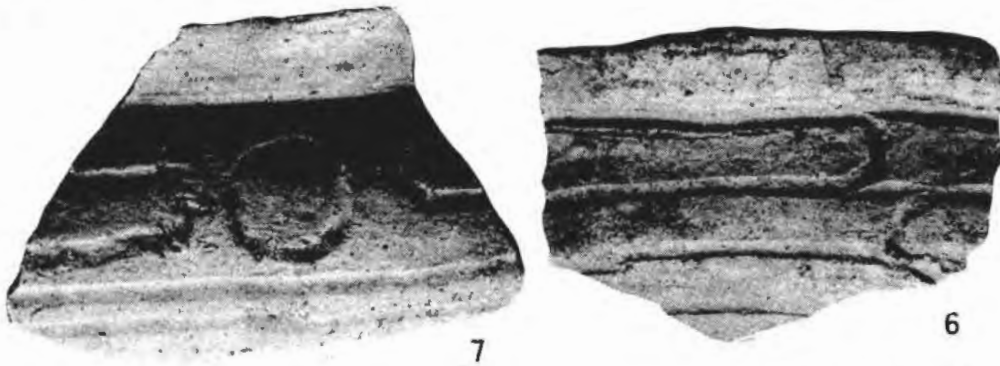
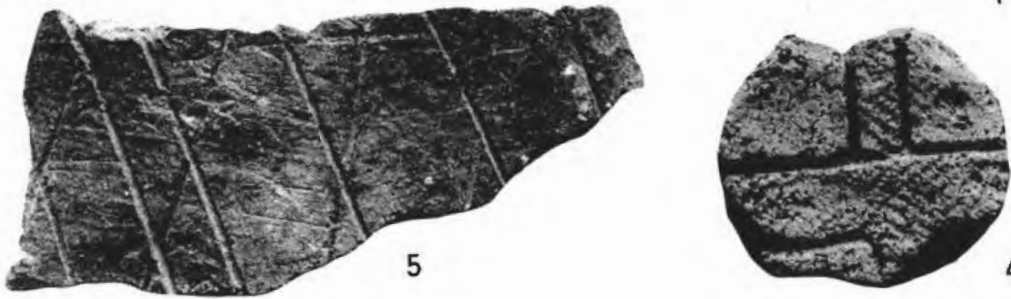
栗木沢川北方の台地に立地する。後期初頭から晩期にかけての遺跡である。ストーンサークルがあったらしいといわれているが確認されていない。

菩提木遺跡 (後期・晩期)

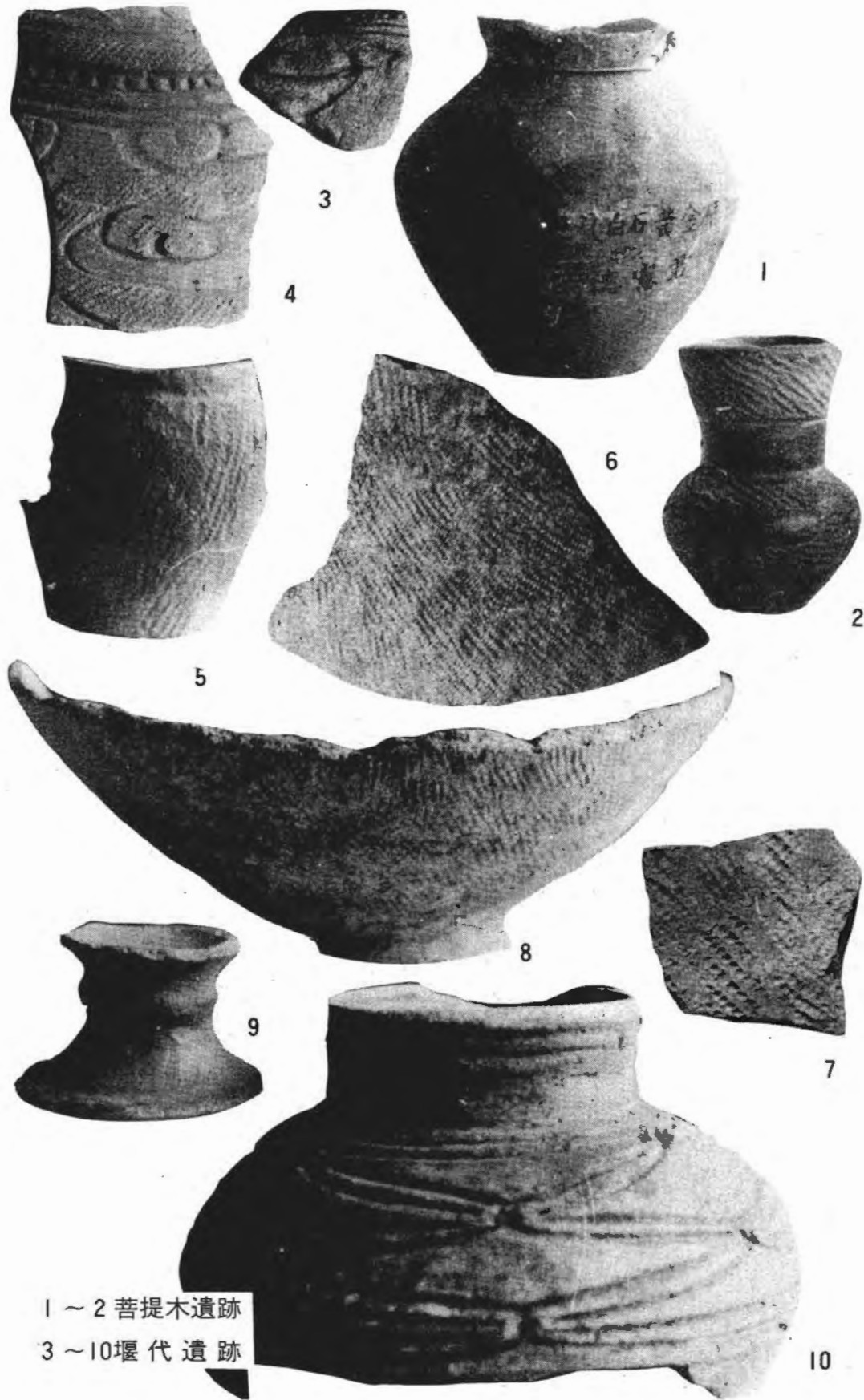
千曳神社東側の丘陵が遺跡である。現在は植林されて山林となっている。晩期の遺物が中心となっているが、後期の土器片・歴史時代の土師片もみられる。

堰代遺跡 (後期・晩期)

元白石小学校南側の丘陵・道路をはさんで東西の畑地と山林に遺跡が広がっている。出土遺物としては、鉢形土器・壺形土器・石斧がある。後期から晩期終末にかけて営まれた遺跡である。



1 ~ 2 十枝内遺跡(1)
 3 ~ 9 底田遺跡
 10 ~ 11 夏間木遺跡



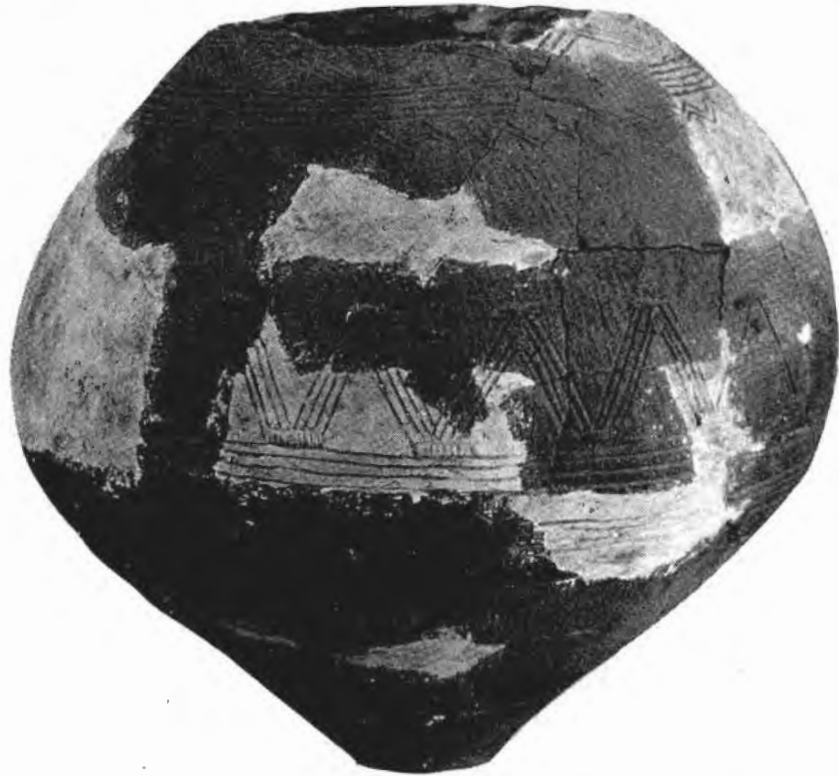
1 ~ 2 菩提木遺跡
3 ~ 10 堰代遺跡

第三章 弥生時代

紀元前三世紀ごろ、大陸から北九州に稲作栽培・機織・金属器の使用等新しい文化が伝播し、縄文時代から弥生時代へと移行する。この文化は、それまでの狩猟・漁労・植物採集の食料獲得とちがい、自ら栽培するところに大きな相違点があり、今日の日本農業がここに始まったといってもよいであろう。

青森県にこの弥生文化が導入されたのは紀元前後ごろであり、およそ二千年前である。米どころと言われる田舎館村からは粳痕のある土器や炭化米が発見されており、稲作が始まったことを裏付けている。天間林村内からは、まだ弥生時代の遺跡は確認されていないが、六ヶ所村馬門・千歳(13)・野辺地町有戸などで知られており、調査がすすめば発見される可能性は高いといえる。

弥生時代の住居は脇野沢村瀬野で一軒調査されているが、縄文時代の住居跡とかわらない円形の竪穴住居であ



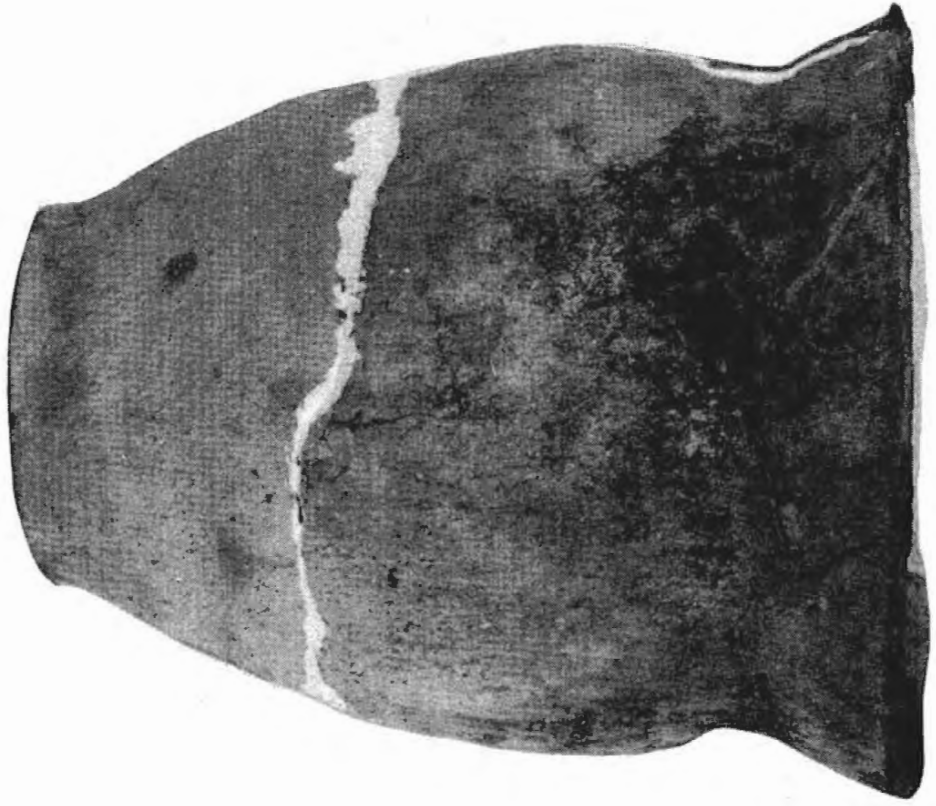
弥生式土器(十和田市出土)

る。また、三厩村宇鉄ではこの時代の土壙墓と甕棺墓の両方が発見されており、やはり縄文時代の葬制を引き継いでいることがわかった。ただ、副葬品から考えるとすでに階級社会に移行していたのではないかと推定される。

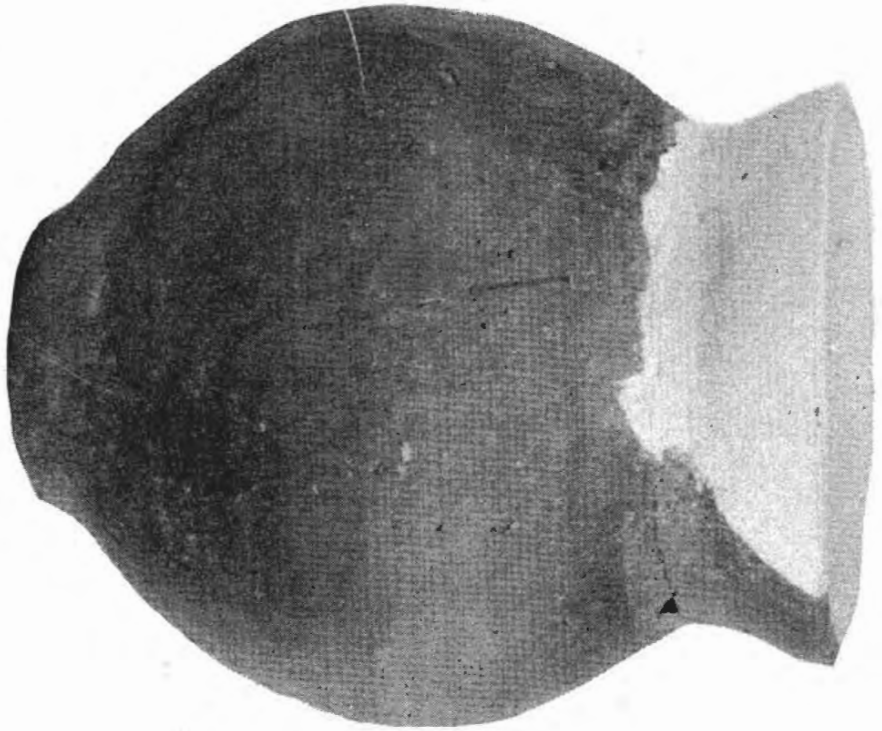
日本史の上では弥生時代の後、古墳時代・奈良時代・平安時代と続くのであるが、本県において古墳は八戸市鹿島沢で発見されているにすぎない。しかも、これらの古墳は七世紀から八世紀にかけて築造されたものと考えられている。したがって、弥生時代終末期（三世紀末）からの数世紀間は、文献の上ではもちろん、遺物の面でも空白期間となっている。

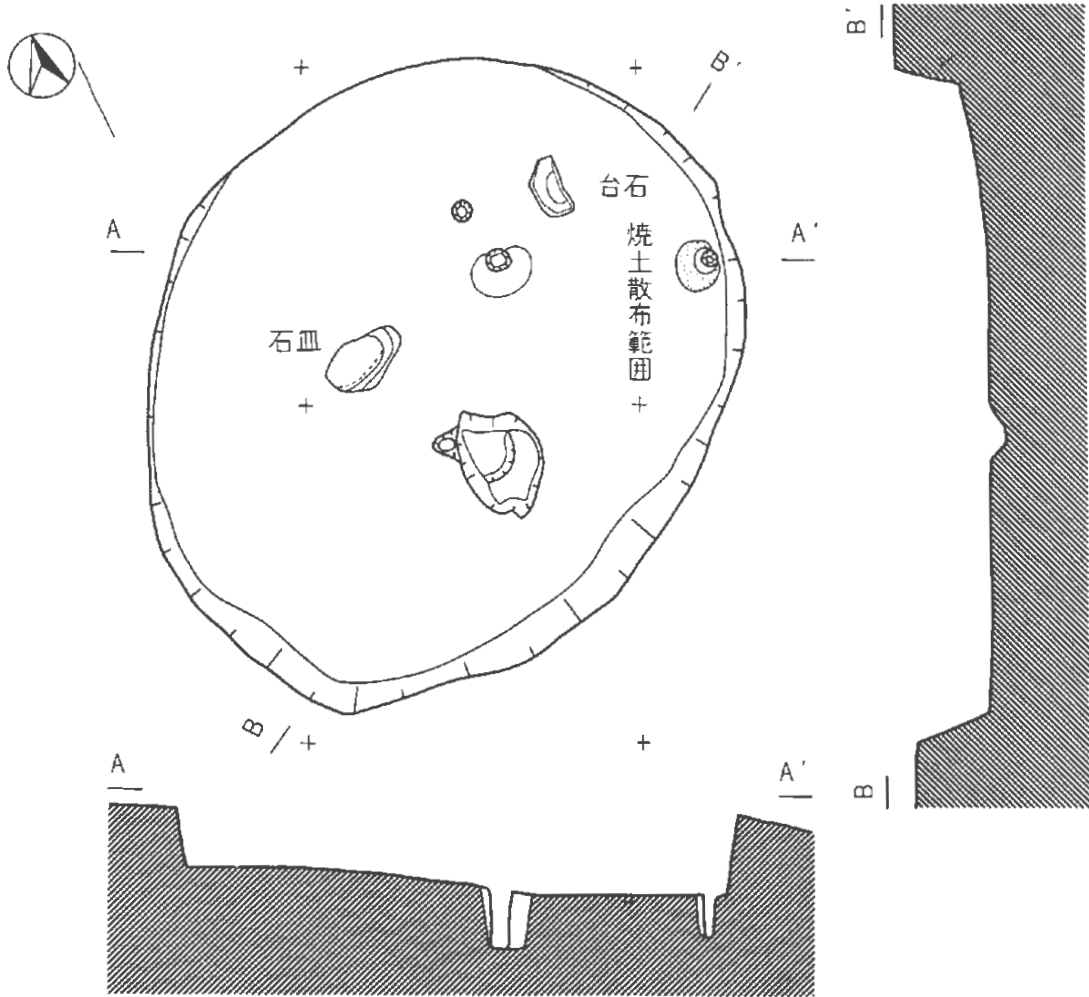
村内で古墳時代以降歴史時代の遺跡としては、白石・疔平・松ヶ沢など十四遺跡知られている。これら遺跡のうち注目されるのは松ヶ沢遺跡である。

松ヶ沢遺跡は小又部落北端坪川の段丘上にあり、現在蔬菜畑に利用されている。昭和二十五年頃畑を耕作中、甕形土師器とともに奈良時代以前の製作とされる須恵器の壺や甕が偶然発見されたのである。地主の話によると、これらの遺物は地表下三〇センチメートル位のところで、直径約一メートルの輪状をなして出土したとのことである。遺物やその出土状況から推測すると、この遺跡は相当な勢力を持った豪族の墓であって、出土遺物は中央からはるばる移入して副葬されたものと考えられる。



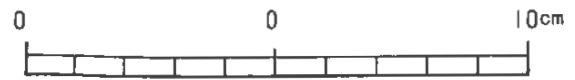
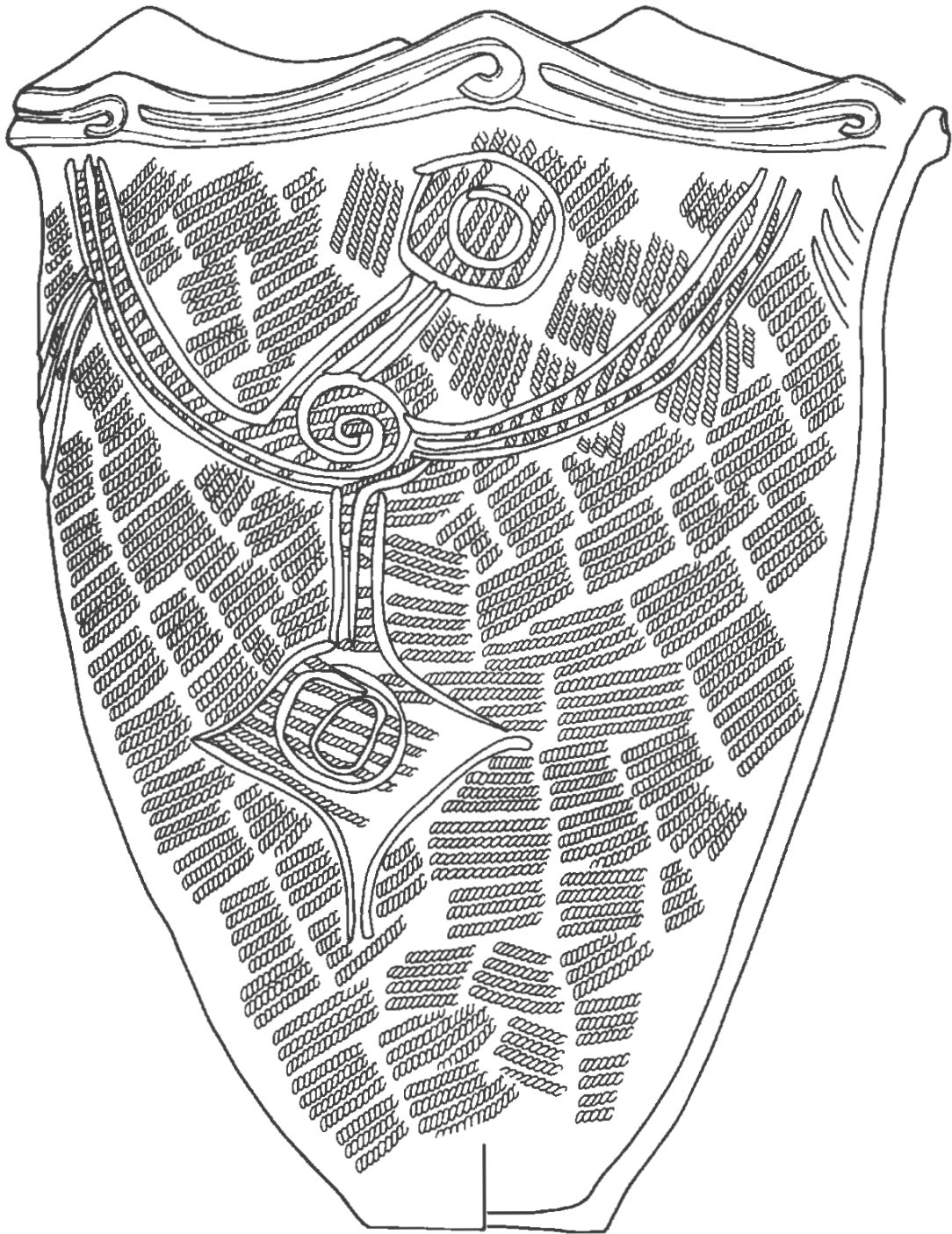
小又松ヶ沢遺跡出土土師器



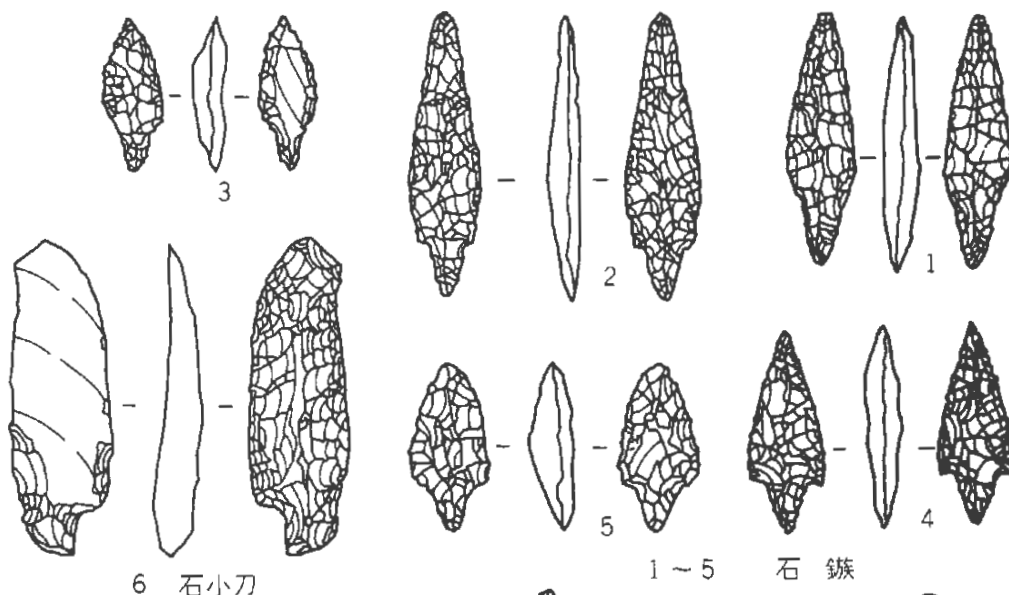


ニッ森貝塚 2号住居跡



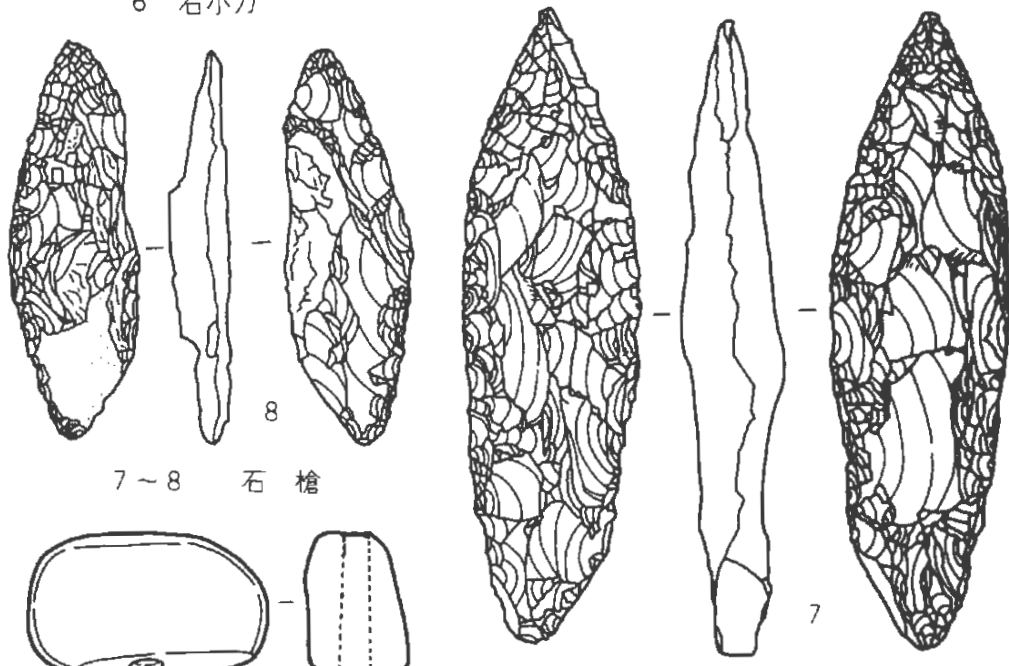


ニッ森貝塚出土遺物実測図(1) (縄文土器)

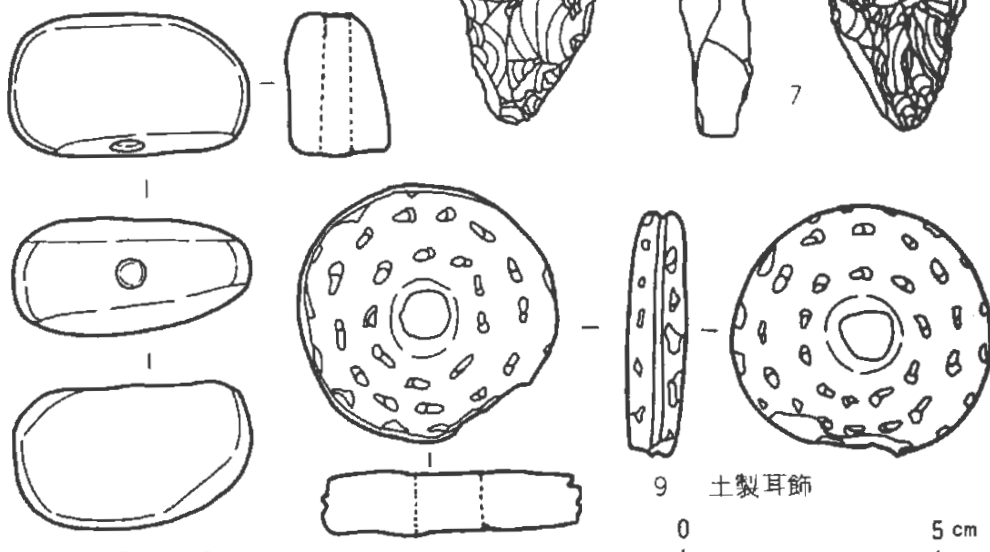


6 石小刀

1~5 石鏃



7~8 石槍

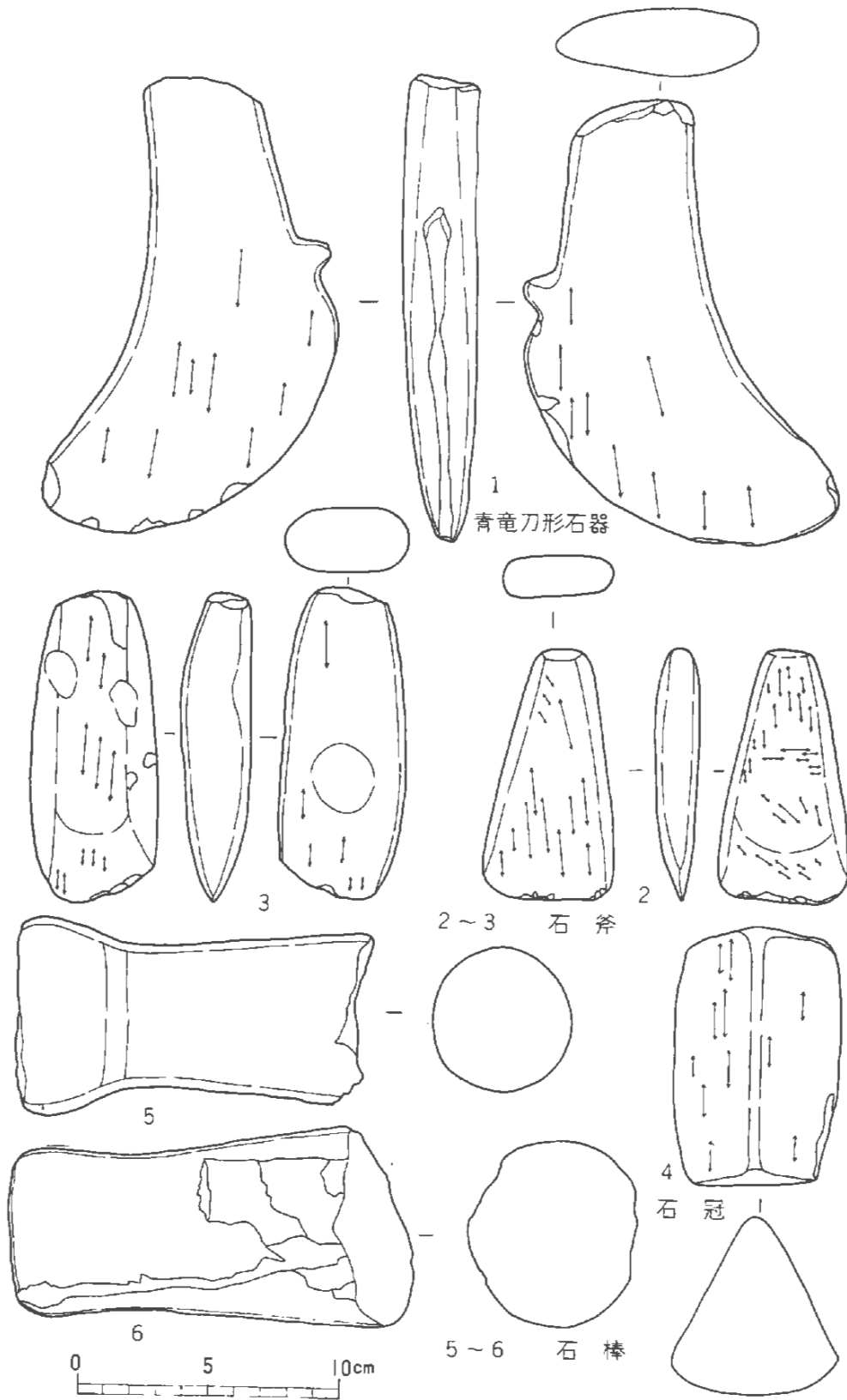


9 土製耳飾

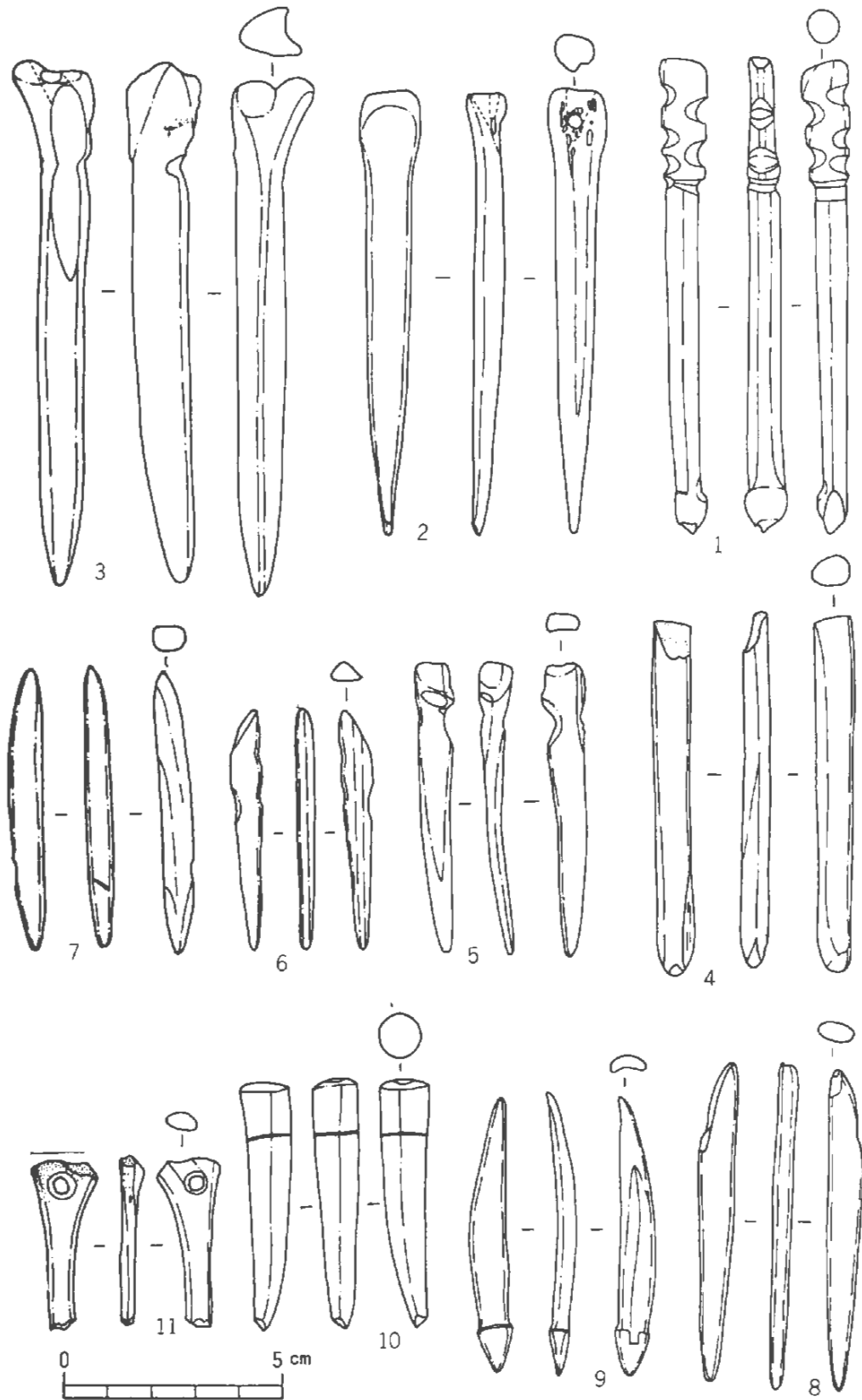
10 硬玉製垂飾品



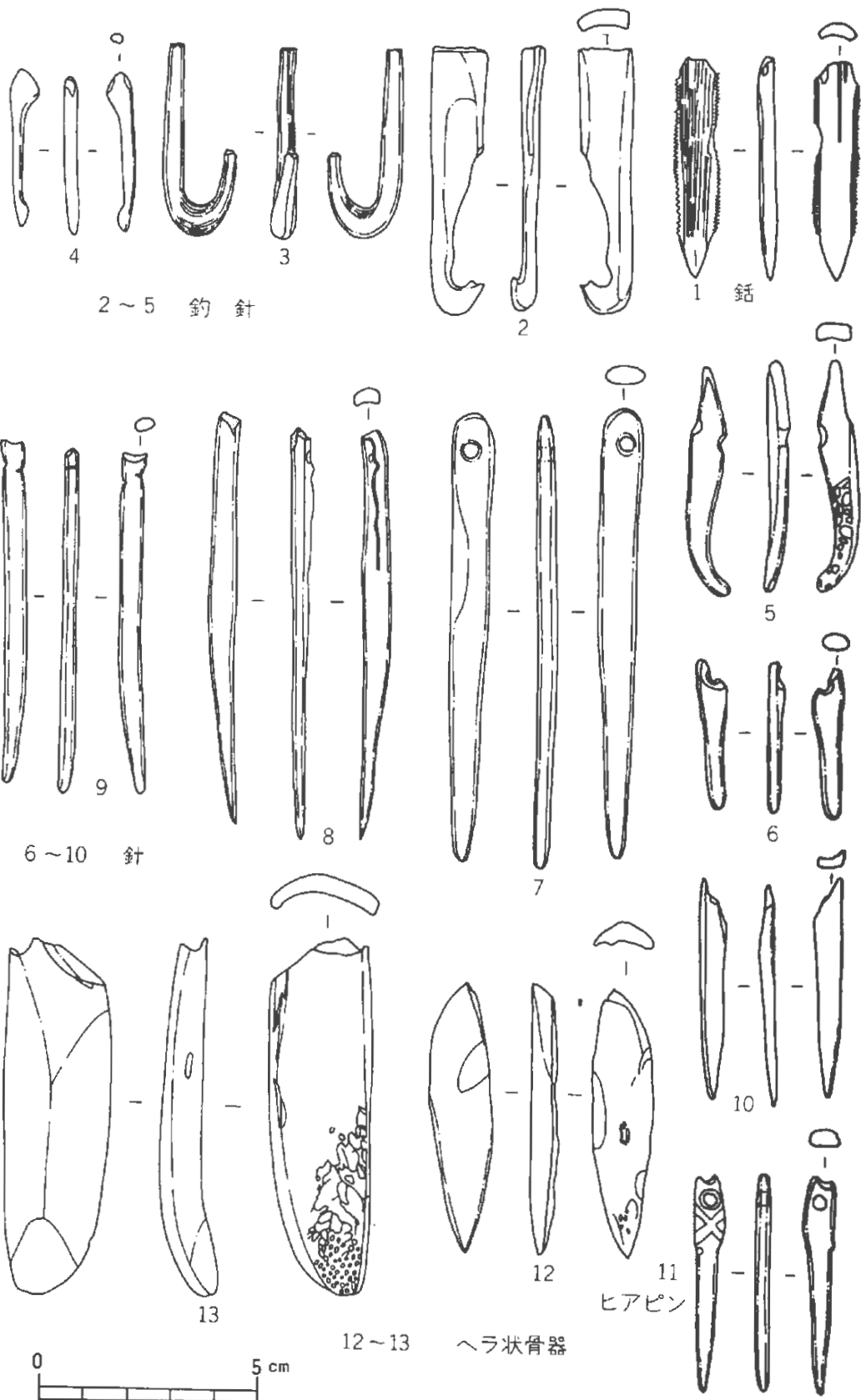
ニッ森貝塚出土遺物実測図(2) (石器他)



ニッ森貝塚出土遺物実測図(3) (石器)



ニッ森貝塚出土遺物実測図(4)(骨角器、銚、3は県重宝指定)



2~5 釣針

1 鉋

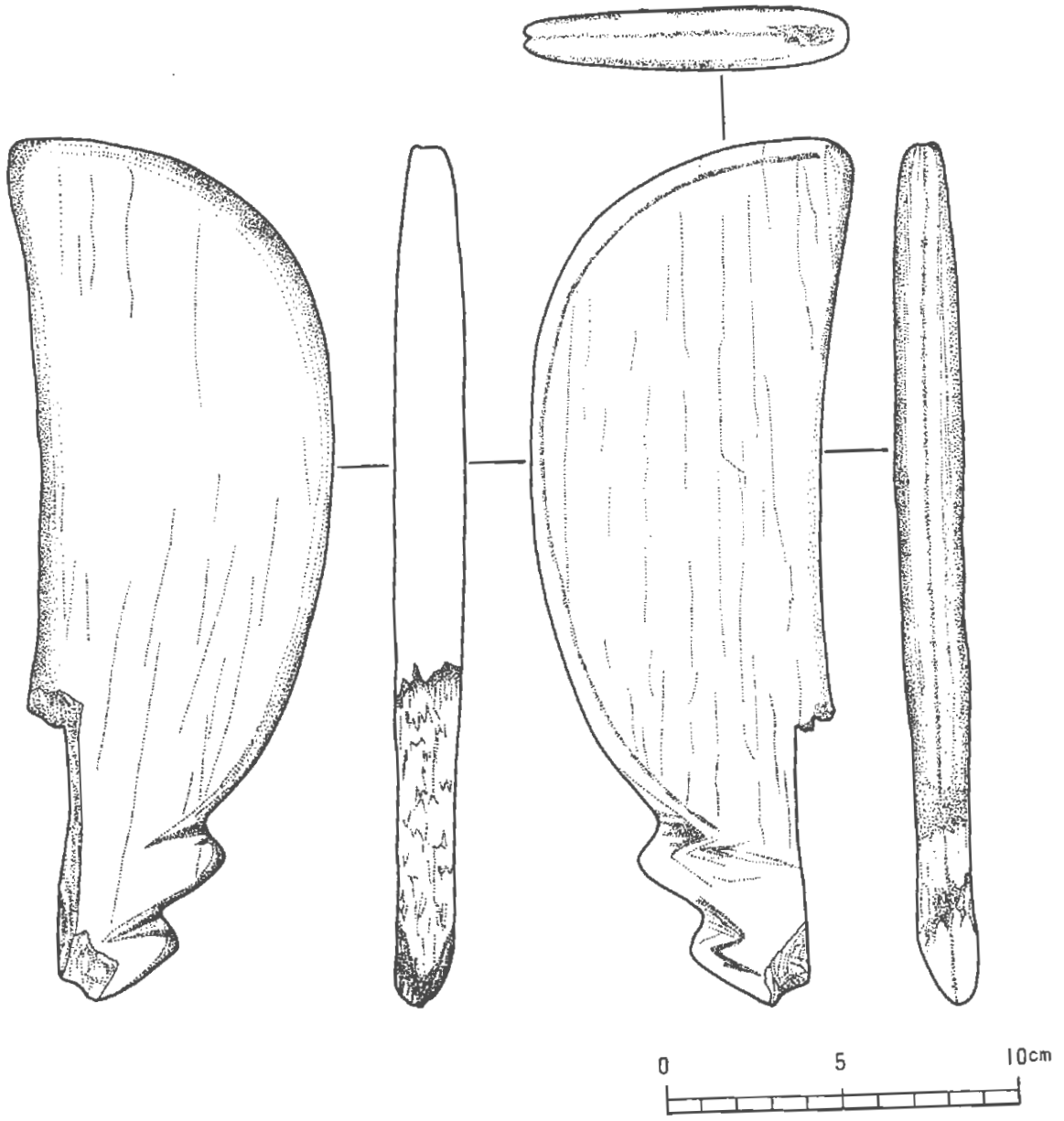
6~10 針

11 ヒアピン

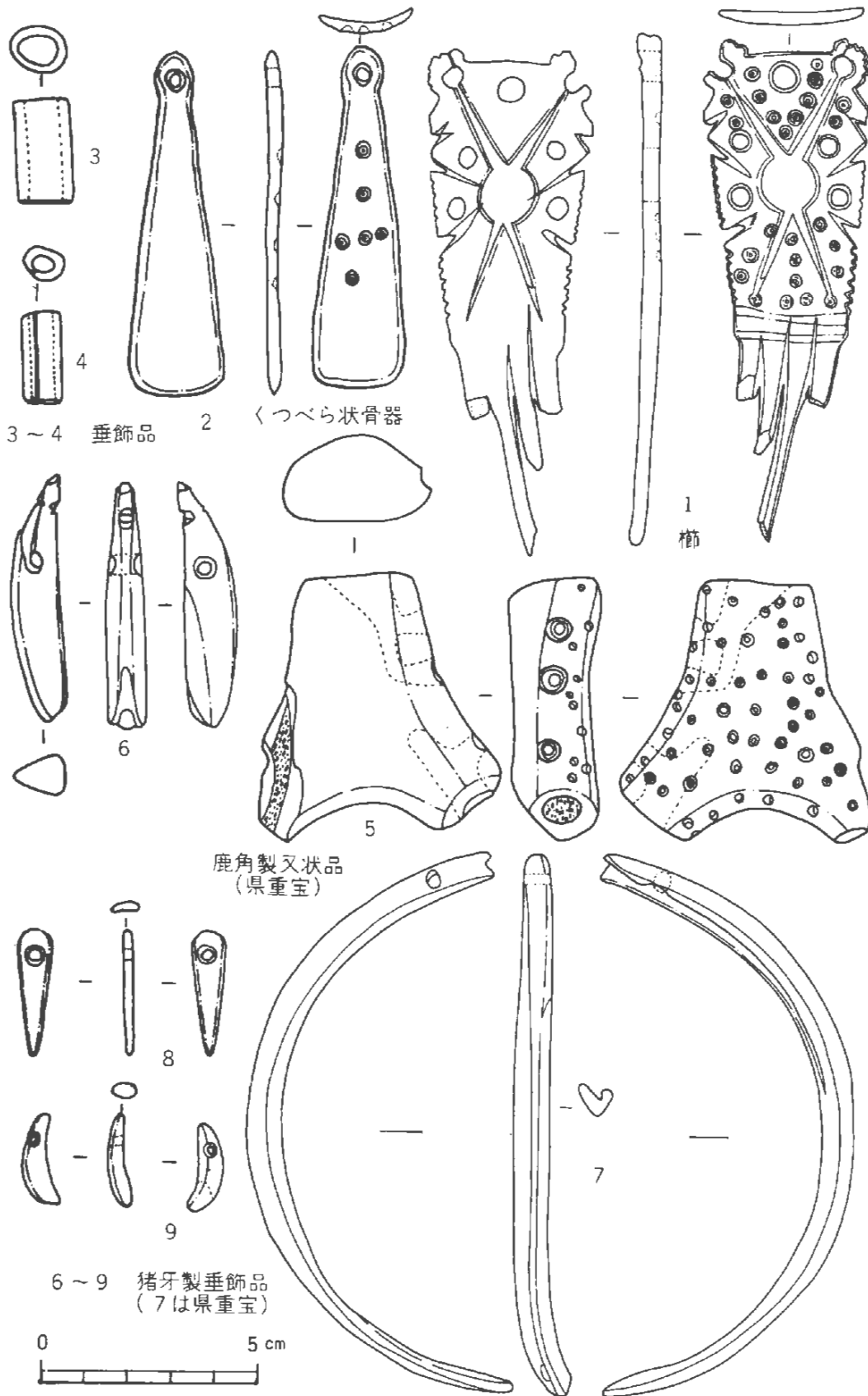
12~13 へら状骨器



ニッ森貝塚出土遺物実測図(5) (骨角器)



ニッ森貝塚出土遺物実測図(6) (鯨骨製青亀刀形骨器、県重宝指定)



ニッ森貝塚出土遺物実測図(7) (骨角牙器)



ニッ森東側貝塚発掘状況



ニッ森西側貝塚発掘状況



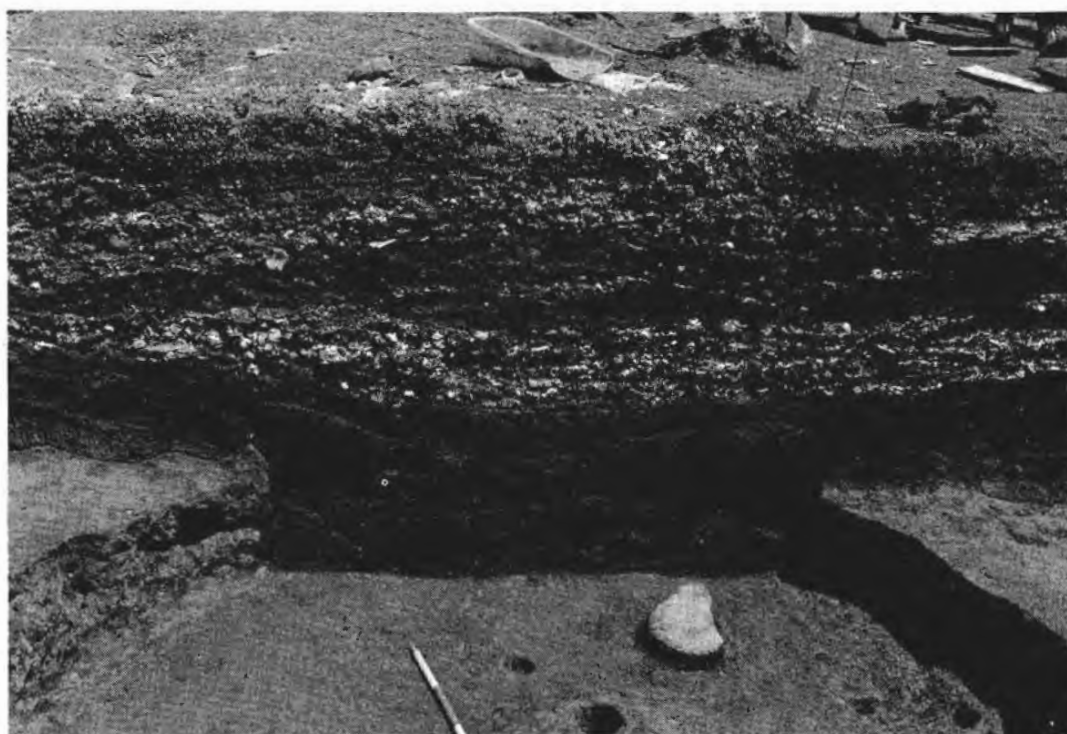
ニッ森西側貝塚発掘状況



ニッ森貝塚 2号住居跡発掘状況



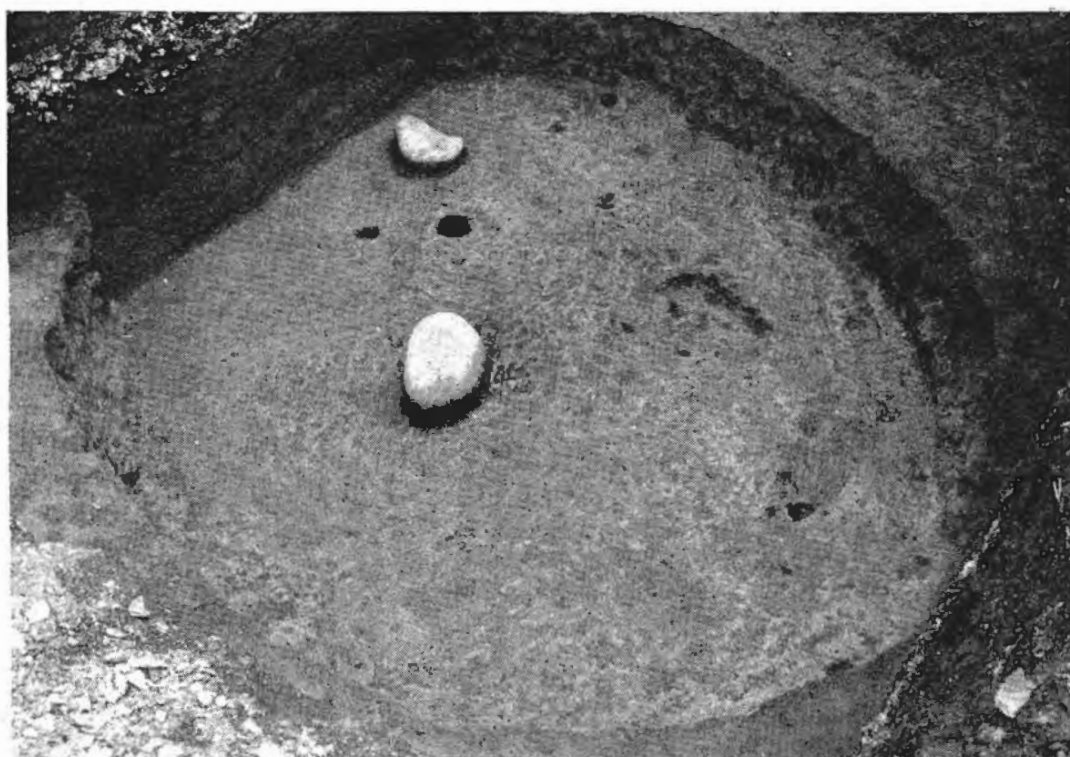
ニッ森貝塚 2号住居跡発掘状況



ニッ森貝塚 2号住居跡上の層序



ニッ森貝塚 1号住居跡



ニッ森貝塚 2号住居跡



ニッ森貝塚土器出土状況

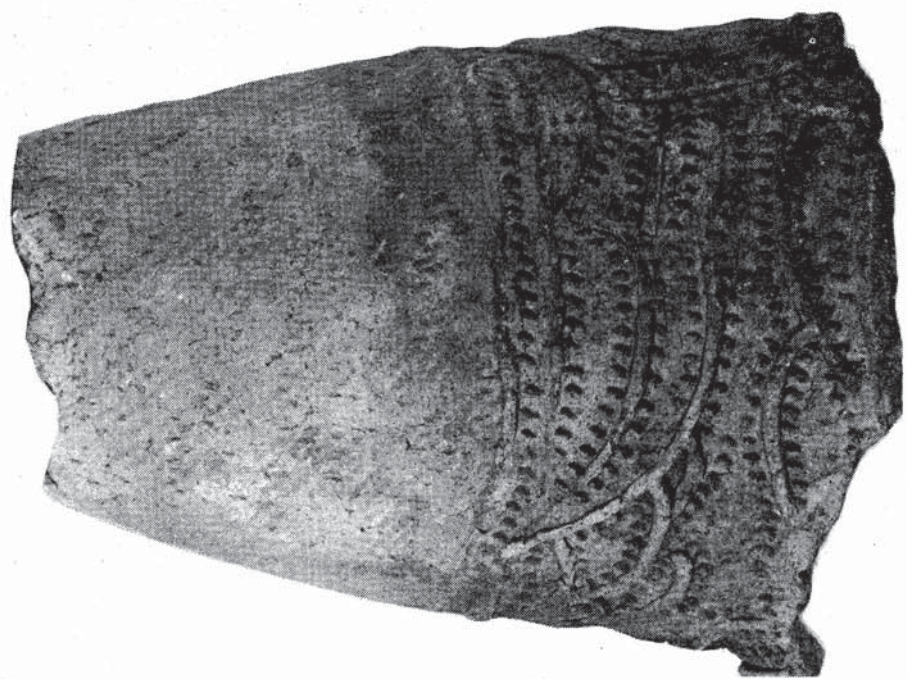
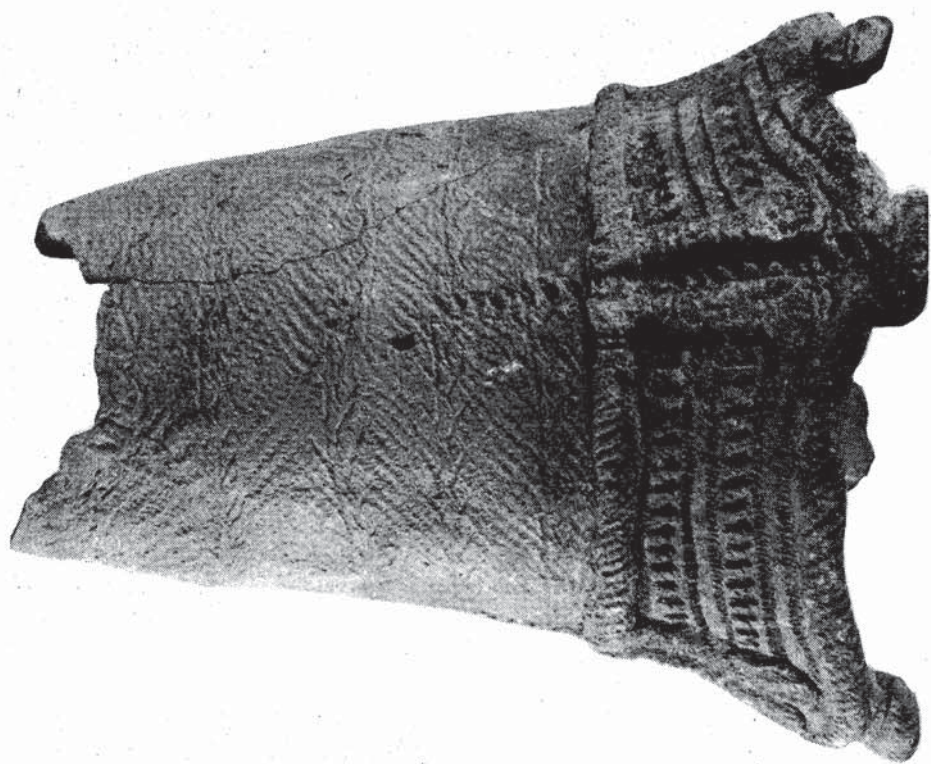


ニッ森貝塚土器出土状況



ニッ森貝塚出土土器





二ツ森貝塚出土土器



ニッ森貝塚出土土器



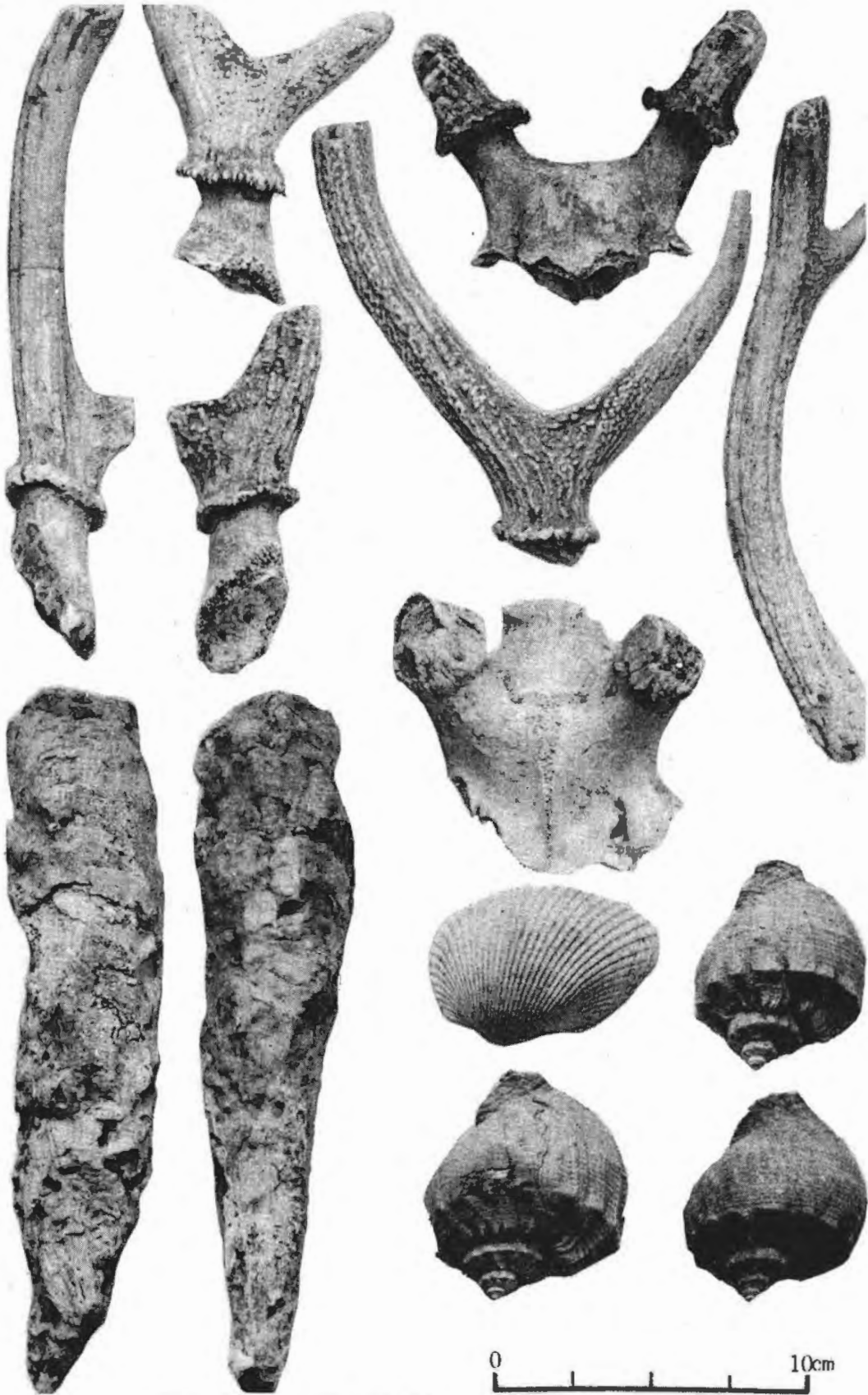
二ツ森貝塚出土石器



ニッ森貝塚出土骨角器



ニッ森貝塚出土骨角器等



ニッ森貝塚出土自然遺物(鹿角、サルボウ、アカニシ、カキ)

主な参考文献

- 角田文衛 陸奥榎林遺跡の研究「考古学論叢」第十輯 昭和十四年
- 村越 潔 小片 保 「青森県ニッ森貝塚発掘調査概要」昭和三十七年 青森県教育委員会
- 山内清男 佐藤達夫 下北の無土器文化―青森県上北郡東北町長者久保遺跡発掘報告「下北」昭和四十二年 九学会編
- 青森県立郷土館 「小田野沢―下田代納屋B遺跡発掘調査報告書」昭和五十一年
- 須藤 隆 土器組成論「考古学研究」第19巻4号 昭和四十八年
- 青森県教育委員会 「むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財分布調査報告書」昭和四十八年
- 村越 潔 「原始時代の人と生活」昭和五十二年 北方新社
- 岩本義雄 天間勝也 三宅徹也 「大昔のふるさと」昭和五十二年 東奥日報社
- 鈴木克彦 青森県出土の奈良時代以前の須恵器「考古風土記」第二号 昭和五十二年
- 青森県教育委員会 青森県遺跡地名表 昭和五十三年
- 青森県立郷土館 「大平山元I遺跡発掘調査報告書」昭和五十四年 青森県立郷土館
- 青森県立郷土館 「宇鉄II遺跡発掘調査報告書」昭和五十四年 青森県立郷土館